

# 經濟論叢

第140卷 第3・4号

---

江戸後期における農村工業の発達……………	中村哲	1
「ナント勅令」前後のプロテスタント……………	木崎喜代治	17
人口高齢化と租税改革……………	木立力	37
ワイマール期財政調整と邦財政高権(上)……………	武田公子	59
公共料金、間接税の設定と公共財供給……………	森統	77

## 研究ノート

人間シュムペーターの一断面……………	根井雅弘	100
--------------------	------	-----

---

昭和62年9・10月

京大經濟學會

## 《研究ノート》

## 人間シュムペーターの一断面

—Christian Seidl の論稿をめぐって—

根 井 雅 弘

「事実、シュンペーターは、学者としての専門分野以外でもシニカルな人という印象を与えた。学者は20歳代がいちばん人事だということを力説すると同時に、彼は、その科学者としての成長期に結婚してしまって、もしその結婚が幸福なものであったら、学者としての成功はあきらめたほうがよいなどと、私たち大学院生に語ったことがある。御本人自身、最初の結婚は24歳のときで、12歳年上の女性とであり、これは、ほどなく破綻した。またシュンペーターは、“シュンペーター学派”をもたぬことで、大学者としてはユニークだが、この点を誰かに指摘されたとき、“スクール（“学派”の意であると同時に、“集団をなして動くものたち”の意）の形で動きまわるのは魚だけではないのか」と、冷笑的に語ったことがある。

こうしたシニカルな態度がみられた反面、シュンペーターは情感の強い人でもあった。チュルノヴィッツで教えていたころ、学生の図書借り出し権を支持して図書館長と決闘をしたこともあるし、また、そこでの女子学生の聴講権に反対した同僚教授にソーダ水の噴出器をあびせたなどという逸話は、彼を識る人にとり決して意外ではない。それに、シュンペーターが、早くから、人生の三つの野心ということを語り、“ヨーロッパでの最高級の馬乗り、同じくヨーロッパで女性からいちばん愛される男、そして世界で並びない経済学者”がそれだと言い、この三つのうち二つだけは達成できそうだと笑談していたことを知る私たちは、残る一つがどれであるかを知りえないまま、彼のロマンティズムに拍手を送る気持だったのである。」<sup>1)</sup> (都留重人)

## は じ め に

人間シュムペーターについて、われわれシュムペーター研究者は彼の弟子たちから数

1) 都留重人『体制変革の政治経済学』（新評論、1983年）61～62ページ、(注)の9。

多くのことを知らされてきた。これまで書かれてきたシュムペーターの評伝は、ことごとく彼らの証言を基にしていたと言ってもよいであろう。その中でも、彼の死後、1950年2月7日に行われたハーヴァード大学連合教授会の会合の公式記録にある一文——「限りなき天賦のエネルギーを与えられていたかに見えるシュムペーターはまた、それを最も惜しみなく使った人でもあった。彼は常に学生の相談相手となり、世界各国から集まり来る少壮学者に助力と指導とを与えるために喜んで多くの時間をさいた。あまりに惜しみなく自らの持てるものを人に捧げ与える彼の献身的態度が、或はその死を早めた一因であったかもしれない。』<sup>2)</sup>——が、人間シュムペーターを語った一つの代表的意見であるように思われる。

だが、それらの証言は、その多くがハーヴァード時代ないしはボン時代のシュムペーターと接した人々によってなされたものであることに注意しなければならない。彼の経歴の中では初期にあたるチェルノヴィツ時代あるいはグラーツ時代において、シュムペーターはどのような生活を送ったのであろうか。また、ハーヴァード時代、彼は弟子たちに向かって「政治には関与するな」ということを口癖にしていたと言われているが、シュムペーター自身は政治的野心を（特に若い頃）持っていなかったのであろうか。少し考えただけでも、そういう疑問が次から次へと生まれてくるのである。

本稿においては、若干の新しい資料を利用しながら、人間シュムペーターのもう一つの断面を浮彫りにすることをねらいとしたいと思う。

### I グラーツの学生との衝突をめぐる<sup>3)</sup>

1912年10月14日午前9時30分、グラーツ大学においてシュムペーターに反対する激しい学生デモが起こった。教室に入るやいなや、彼は憤激した学生たちからどなりつけられ、その講義は同年11月5日まで、学生たちによってボイコットされてしまった。学生たちは、シュムペーターがあまりにも厳格な試験を課し、自分たちや彼の前任者（Richard Hildebrand）のことを口を極めて非難したのをとがめたかったのである。

2) Seymour E. Harris, ed., *Schumpeter: Social Scientist*, 1951, p. x. 中山伊知郎・東畑精一監修/坂本二郎訳『社会科学者シュムペーター』（東洋経済新報社、1955年）20ページ。

3) ここでの叙述は、次の文献に大きく依存している。Christian Seidl, "Joseph Alois Schumpeter: Character, Life and Particulars of his Graz Period", in Christian Seidl, ed., *Lectures on Schumpeterian Economics*, 1984, pp. 187-205.

どうしてこういう事態に及んでしまったのであろうか。それを説明するためには、まずシュムペーターがグラーツへ招かれるまでの経緯を述べなければならないであろう。

グラーツにおける彼の前任者は、先にもふれたように、Richard Hildebrand という人であった。彼は、旧歴史学派の創設者の一人である Bruno Hildebrand の息子であり、またいかなる種類であれ経済理論というものに全く理解を示さない人であった。その彼が引退するのにともなう空白を埋めるために、グラーツ大学の法学部は後任者を捜すための委員会（メンバーは、Hauke, Hildebrand, そして Layer の各教授で、Hildebrand がこの委員会の委員長兼レフェリーであった）を任命した。

その委員会は、学部に対して3人の候補者（第一にイエーナの Robert Schachner, 第二にマイン河畔のフランクフルトの L. Pohle, そして第三にプラハの Zuckerkandl）を提案する旨の報告書を提出した。ところが、どういうわけか、その報告書の中には、それらの3人の候補者ばかりでなく、その他の研究者の資格を査定する文章が含まれていた。Seidl は、それは学部の他のメンバーが、シュムペーターやシュビートホフ等の候補者を持ち出そうとする動きを封じるために意図されたと推察しているようである<sup>4)</sup>。というのは、たとえばシュムペーターについて、それは次のように報告しているからである。

「彼は、現実の生活とは何の関係もない数学的ないし機械的概念やアナロジーを弄ぶだけの不毛で、抽象的で、しかも形式主義的なアプローチを固守している。彼の“理論経済学の本質と主要内容”に関する書物は、空虚なありきたりのものや取るに足らぬもの以外の何物も含んでいない。しかし、その本には、まるでそれらが重要な発見であるかのように、大いなる自己満足と強調をもって述べられているのである。これまでのところ、彼は科学的研究と見なしうような何物も提供していない。」<sup>5)</sup>

さて、委員会の提案は、1911年6月12日の学部の会合に提出された。ところが、委員会の提案に果敢にも異を唱える教授が少なくとも2人存在したのである。その2人とは、ローマ法および商法の Gustav Hanausek と刑法の Adolf Lenz の両教授であり、特に Hanausek の方は次のように発言し、1911年6月14日にもシュムペーターを支持

4) *Ibid.*, p. 194.

5) Archives of the University of Graz, Law Faculty, No. 1178 ex 1910/11, quoted in Seidl, *op. cit.*, p. 194.

する少数票を投じたのであった。「シュムペーターは、擢んでた才能と独創力の持ち主であり、彼のような卓越した人物は、経済学の教授職のための提案において無視されてはならない。」<sup>6)</sup>

Hanausek の主張に対しては、当然予想されるように、Hildebrand の側からの反撃が行われたけれども、とにもかくにも、シュムペーターは1911年11月13日、グラーツ大学の正教授に任命された。教授会のメンバーの大多数が反対したにもかかわらず、どうしてシュムペーターは正教授に指名されることができたのであろうか。かつてハーパラは次のような説明を与えていた。

「1911年に、シュムペーターは、ヴィーンの南150マイルの、オーストリアのステイリア地方の首府、グラーツ大学に招聘された。彼は、ある地方のつまらぬ俗物を推薦していた教授会の反対投票にも拘わらず、勅令によって（「陛下の決意によって」）任命された。」<sup>7)</sup>

あるうわさによれば、帝国科学アカデミーの長であり、三度も大蔵大臣を勤めた経験のあるベーム＝バヴェルクが、オーストリアの文部大臣 Karl Graf Stürgkh (1909年2月10日から1911年11月3日までその任にあり、後に1916年10月21日に暗殺されるまで首相を勤めた) と皇帝に働きかけたのだともいう<sup>8)</sup>。

真相がどうであれ、そういう教授会の反対を押し切る形で正教授に任命されたのであれば、シュムペーターがグラーツで何の障害もなく成功裏に物事を運ぶことは最初から予想されえないことであつたようにも思える。

グラーツへ着任すると、シュムペーターは経済学についての高度な基準を設定した。グラーツの学生たちは、前任者 Hildebrand のどちらかと言えば中庸の基準に慣らされていたので、シュムペーターの要求した基準にたえかねて、先に記したとおりの反シュムペーター・デモとなつたわけである。

学生たちは、シュムペーターの教授職からの解任を要求した。事態の進展に驚いたス

6) Archives of the University of Graz, Law Faculty, No. 1685 ex 1910/11, quoted in Seidl, *op. cit.*, p. 195.

7) Gottfried Haberler, Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950, in Harris, ed., *op. cit.*, p. 27. 邦訳, 82ページ。棒点は引用者による。

8) Cf., Seidl, *op. cit.*, p. 195. ただし, Seidl は, その証拠はないとしているが, 同様の見解が, スミッシーズによつても表明されている。Arthur Smithies, Memorial: Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950, in Harris, ed., *op. cit.*, p. 12. 邦訳, 39ページ。

テリリアの地方政府も、グラーツ大学の総長からこの事件に関する報告を要求するという始末であった。ここで留意しなければならないのは、正教授任命の時とは対照的に、シュムペーターが法学部当局全体の支持を得ることができたことである。総長も学部長も、紛争をなんとか和解へと持ち込むために最善を尽くしたのである。そうして、ようやく、1912年11月5日に、シュムペーターは講義を再開することができたのであった。

グラーツ事件で見られた人間シュムペーターは、ハーヴァード時代における彼、すなわち「最後の成績を考査する段になると、彼は、一つの伝説とさえなっていた、彼の寛大さによって、点をうんと甘くつけていた」<sup>9)</sup>という彼とは極立ったコントラストをなしている。グラーツの学生たちから教室に入るやどなりつけられ、しかも講義までボイコットされたという話は、以下のようなサムエルソンの証言によってシュムペーターを理解してきたわれわれにとっては、容易に信じることのできないものである。

「昼食後の講義時間というものは、講義をするものにとって、一番油断のならないものである。けれども彼の教室では、かつてあの甘い居睡りの誘惑に陥る学生が一人もなかった。ユーモアはいつも筆記の手を忘れさせ、分析を拒んだ。シュムペーターの場合には、彼は決して駄洒落を飛ばしたり、予めおちを考えた話をして笑わせたりしたわけではなかったが、かといってまた決して無表情でも謹厳実直でもなかったが、ともかく教室に何とないユーモラスな感じがただよ、最も生真面目なラドクリフの学生をさえも、輝かしい問題提起と妙をえたる即答とが火花を散らす戦場で自分が戦っているのよう感じさせる雰囲気を与えていたことは明らかである。彼は、老練なるカレッジの先生達につきものともいうべき悪弊を少しももっていなかった。というのは、永年に亘ってかなり注意して聞いていたが、彼は決して同じ話を二度しなかった。私は、自分が講義をもって数年間やってみた後で初めて、これがいかにすばらしいことであるかを身にしみて理解したのである。」<sup>10)</sup>

とにかく、グラーツのシュムペーターは、われわれがそう信じてきた人間シュムペーターとは別人の感を与える。グラーツ時代、彼はまだ若かった（正教授に任命された

9) Paul A. Samuelson, Schumpeter as a Teacher and Economic Theorist, in Harris, ed., *op. cit.*, p. 52. 邦訳, 151ページ。

10) *Ibid.*, p. 51. 邦訳, 146~147ページ。さらに、サムエルソンは、次のようにも言う。「点取り虫やぶざけものやおしゃべり等による講義中断に対してすら、彼はむしろ極めて寛容であった。」(*ibid.*)

1911年には、彼はまだ28歳であった)ということも一つの理由かもしれない。しかし、東洋的な魅惑にあふれていたチェルノヴィッツで過ごした幸福な日々とは対照的に、グラーツ時代のシュムペーターは決して幸福ではなかったという。ハプスブルグ帝国の都ウィーンを深く愛した彼にとって、グラーツは「全く息の詰りそうな田舎」<sup>11)</sup>にすぎなかったのである。彼は、汽車でわずか3時間という便宜を利用して、グラーツからしばしばウィーンへ出かけようとした。だが、それでもまだ居心地が悪かったのか、1913年から1914年にかけて、ニューヨークのコロンビア大学へオーストリア交換教授として海を渡っていった。シュムペーターの心は、とうにグラーツを離れていたであろう。そういう彼の心境が、もしかしたら、彼の前任者や学生たちに対する態度の中に現われてしまったのかもしれない。

## II 政治家としてのシュムペーター<sup>12)</sup>

1915年、ドイツ議会の有力メンバーであった Friedlich Naumann は、中欧に関する書物を出版した。その本の中で、彼はドイツ語圏の全住民がその政治的・経済的利益を考慮して、ドイツ帝国を中心に結集することによって、西と東からの軍事的脅威に対抗すべきことを提案したのである。

そういう構想に対しては、ドイツにもオーストリア=ハンガリー帝国にも、賛成者と反対者がいたのだけれども、少なくともドイツ政府内においては、その主唱者たちが大勢を支配した。ウィーンにいるドイツの大使 Heinrich von Tschirschky と Bögendorff は、特にドイツとオーストリアとの経済同盟を望んでいたという。そのような動きに押されて、1915年11月13日のドイツ側の秘密メモが生まれた。そのメモは、オーストリア=ハンガリー帝国に対して、スラブ民族の抑圧とオーストリアにおけるドイツ語圏住民の優位の回復を要求するものであり、またさらに、ドイツとオーストリアの間に特惠

11) Haberler, Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950, in Harris, ed., *op. cit.*, p. 27. 邦訳, 82 ページ。

12) ここでの叙述も、主として次の文献を基にしている。Seidl, "Joseph Alois Schumpeter: Character, Life and Particulars of his Graz Period", in Seidl, ed., *op. cit.*, pp. 187-205. なお、政治家としてのシュムペーターといっても、この節では彼が大蔵大臣であった時期の出来事は取り上げない。その点については、次の文献を参照されたい。Eduard März, Joseph A. Schumpeter as Minister of Finance of the First Republic of Austria, March 1919-October 1919, in Helmut Frisch, ed., *Schumpeterian Economics*, 1981, pp. 162-179.

関税協定を結ぶことを大胆に要求するものであった。

その要求に対するオーストリア＝ハンガリー帝国の外務大臣 Stephan Graf Burián の回答は、第一点のスラブ民族の抑圧についてははっきりと拒絶、しかしながら、第二点の関税協定については明言を避けるものであった。Seidl によれば、Burián はオーストリア＝ハンガリー帝国の衰退した地位ゆえに第二点の要求を拒絶する余裕がなかったのだという<sup>13)</sup>。

さて、以上の話にどのようにしてシュムペーターが介入してくるのであろうか。それはつまりこういうことであるらしい。ドイツ当局は自ら提案した関税協定についての専門家の意見を聞くため、当時はブラハ大学の教授であったデュッセルドルフ生まれの Arthur Spiethoff (彼はオーストリアの経済について造詣が深いと目されていたようである)にその問題に関するメモを依頼した。その Spiethoff が、書き上げたメモのコピーをおそらくは1916年のはじめにシュムペーターに送付したのであった。

それを見るや、シュムペーターは、オーストリアの征服こそ、ドイツのもっとも顕著な戦争目的なのではないかという疑いを抱いた。そういう疑惑の念は、彼が有名な Heinrich Lammasch (彼はオーストリアの上院のメンバーであり、結局のところ、オーストリア帝国の最後の首相となった。第一次世界大戦中は、オーストリア平和運動の有力な支持者の一人であった<sup>14)</sup>)へあてた手紙 (1916年2月21日付)の中に表明されている。そして、シュムペーターは、今こそ Fürst Franz Liechtenstein のような貴族議員を勧誘して関税同盟反対の運動を起こし、また関税同盟が王朝に対してもつ危険を皇帝に訴えるべきだと Lammasch に提案したのである。

Lammasch は、シュムペーターに関税同盟反対のメモの作成を依頼し、それは少なくとも1916年3月5日には完成された。シュムペーターは、そのメモが“conservative circles”の間で回覧されることを熱望し、またそれを政治的影響力のある人物たちへ送付した。

Seidl は、オーストリアの国立図書館に保管されているそのシュムペーター・メモ3つ(それらは、Angelo Eisner von Eisenhof あてに送られたもので、第Iメモには「1916年春グラーツにて」、第IIメモには「1916年12月1日グラーツにて」、第IIIメモに

13) Seidl, *op. cit.*, p. 202, note 76.

14) *Ibid.*, p. 202, note 78.



は「1917年4月グラーツにて」と記されてあったという。)を偶然発見することができた。彼によれば<sup>15)</sup>、第一のメモは、関税協定および関税同盟に反対するもの、第二のメモは、帝国の側からの平和へのイニシアティブの發揮に賛成するもの、そして第三のメモは、帝国の単独の平和への賛意を情熱的に論じたものであったという。

かつてハーバラーの記した一文——「テレジアニウムでの学生時代から、上流貴族と親交のあった彼は、やがてカール皇帝や王廷内のサークルに味方して、オーストリアと西欧諸列強との単独講和を締結せんとする(失敗に終わった)謀議に参画した模様である。』<sup>16)</sup>——の意味は、こういうことであったか。

このように見てくると、少なくとも若い頃のシュムペーターに政治的野心が全くなかったと言うことはできないことがわかってきた。彼には、政治的影響力を行使したいという明白な野望があったとさえ、言ってもよいかもしれないのである。というのも、シュムペーターは後に Otto Bauer に推薦されて、Karl Renner 内閣の大蔵大臣に就任(1919年3月15日)するのだけれども、Bauer その人は、オーストリアとドイツとの政治的同盟の熱烈な支持者であったからである。Bauer は、かつてシュムペーターがドイツとオーストリアとの関税同盟に反対するために、いかに有力者たちの間を政治的に動き回ったかを、おそらく知らなかったに違いない。

今やハーヴァード時代のシュムペーターとのコントラストはあまりにも鮮やかである。彼は、日本からハーヴァードを訪れた経済学者に対して、次のようなアドバイスを与えたと伝えられているからである。

「けれども、シュムペーター(J. Schumpeter)先生のところで十カ月を過ごしたおかげで、私は、私の学究生活にとって決定的な役割を演ずるほどの重要な教訓を、少なくとも三つ、与えてもらったのだった。(1)政治——私はその柄でないところの——に足を踏み入れるな、(2)「学派をつくる」ぐらいの識見で研究テーマを選べ、(3)経済学の研究に精髓を打ちこめ——というのがそれだった。』<sup>17)</sup>

15) *Ibid.*, p. 203.

16) Haberler, Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950, in Harris, ed., *op. cit.*, p. 31. 邦訳, 92 ページ。

17) 柴田敬「ケインズ経済学を超えて」、美濃口武雄・早坂忠編『近代経済学と日本』(日本経済新聞社, 1978年)所収, 151ページ。この引用の中の2番目のアドバイスに注意せよ。シュムペーターは、本当は学派をつくりたかった(けれども、結局は、つくることができなかった)。

何がシュムペーターの寛容をもたらしたのか、はっきりしたことはわからない。おそらく、自らの大蔵大臣在職中の出来事、そして挫折の経験が後の彼の生活態度に大きな影響を及ぼしたことは確かであろう。しかし、晩年政治には関係しなかったとしても、やはり彼の日常生活の中に政治家らしき態度が残っていたとも考えられるふしがある。われわれは、むすびに代えて、その点に言及したいと思う。

### むすびに代えて

かつてサムエルソンは、シュムペーターを「偉大なシュール・マン」<sup>18)</sup>と評したことがある。また、ハーバラーによれば、「実際には、彼は、外面的な成功や人気といったものを、甚だ気にするたちの人であった」<sup>19)</sup>という。

Seidl は、そういう証言に支えられて、次のような興味深い仮説を立てている。

「シュムペーターは、彼の同時代人たちに対して、自分が天才、すなわち世界一の経済学者であることを自ら確信していることをみごとにまでにはっきりさせた。彼はこの資格にかなうように自分の生活を形づくったのである。鈍感な研究者が苦勞して進まなければならなかったのに対して、天才はよく勉強せずとも最良の研究を刈り入れる。だから、シュムペーターも、自分があまり勉強していないというみせかけを注意深く保持した。第二に、天才は彼の科学の大家であるから、明らかに原稿を基に講義をすることはけっしてしない。シュムペーターもそうであった。しかし、彼は講義のための詳細な原稿を工夫するのに多くの時間を費したのである。しかしながら、彼は教室ではそれらをけっして使わなかった。たとえ次の年に同じコースの講義をしたとしても、彼は古いノートは使用せずに、つねに新しいものを工夫した。ハーヴァードのシュムペーター記録には、彼の講義のためのそのようなノートが数多く残されているのである。」<sup>20)</sup>

グラーツでの事件、そして政治家シュムペーターを跡づけてきたわれわれにとって

点に、ケインズとシュムペーターの経済学の違いを見てとっているのが、伊東光晴教授の解釈である。伊東光晴「ケインズとシュムペーター——19世紀の社会科学と20世紀の経済学」、『別冊経済セミナー ケインズ生誕100年』(日本評論社、1983年)所収、172~177ページ参照。

18) Samuelson, Schumpeter as a Teacher and Economic Theorist, in Harris, ed., *op. cit.*, p. 50. 邦訳、145ページ。

19) Haberler, Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950, in Harris, ed., *op. cit.*, p. 47. 邦訳、136ページ。

20) Seidl, *op. cit.*, p. 187.

は、こういう仮説もなるほど真理の一面を突いている可能性が高いものに思えてくる。たしかに、シュムペーターは、偉大な社会学者であった。そして、多くの欠点を有しながらも、彼が思いやりの深い人間であったことも事実であろう。にもかかわらず、「まことシュムペーターという人は、自分は水で我慢しながら、他の人には美酒をすすめるといったそういうたもの人であった」<sup>21)</sup> というハーバラーの文章だけで彼を理解してきたものは、グラーツ時代の彼の言動を知ってきっと失望するであろう。

結局のところ、多くの偉人と同じように、シュムペーターも一筋縄では行かない多面的な人物であったわけである。

---

21) Haberler, Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950, in Harris, ed., *op. cit.*, p. 39. 邦訳, 114 ページ。